

Title	スピノザ『無限についての書簡』と世界永遠説
Author(s)	小竹, 陽介
Citation	メタフュシカ. 2019, 50, p. 75-88
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/73768
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

スピノザ『無限についての書簡』と世界永遠説

小竹陽介

はじめに¹

スピノザの『無限についての書簡』と呼ばれる書簡がある。ゲルーの有名なコメンタールの付録としてこの書簡への長い注釈が掲載されており、その注釈の英訳がある論集に再掲されていることから伺える通り、研究者からの注目度は高い²。とはいえこの書簡、いまいち掴みどころのないテキストである。

友人ロデウエイク・マイエルからの質問に対する応答ということで「あなたは無限に関する私の思索の結果を伝えてくれるよう望んでいます。喜んでそのようにしましょう」と彼は言う。しかし肝心のマイエルの質問が記された書簡が残されていない。だから実際にどのような質問がなされたのかわからず、それゆえ文脈がはっきりしない。続けてスピノザは、無限にもいくつかの種類があって、無限について困難なものとした数々の問題がそれらを正しく区別しなかったことに起因すると主張する。またそうした区別について詳しく立ち入る前にまず、永遠や持続、実体や様態といった概念について説明しなければならない、と。ところが文脈が明確でないため、何を理解するために無限の種類を区別する必要があるのか、また永遠や持続、実体や様態といった概念を知る必要があるのかわからない。

しかし裏を返すと、それはこれまで注目を受けてこなかった、いわば隠れた文脈もありうるということでもある。そうすると、予備知識として当時のある時代背景を意識しておくことによって、今まで知られていなかった意義をこの書簡から引き出すことができるかもしれない。そこで本稿では、17世紀の世界永遠説についての議論を背景としてこの書簡を読み解くことにする。

¹ 『エチカ』をE、『往復書簡集』をEp、『形而上学思想』をCMと略記する。スピノザのテキストはゲブハルト版(Gebhardt, Carl(ed.) [1925], Spinoza opera,(Heidelberg: Carl Winter))を使用。邦訳は岩波の畠中訳を参照した。

引用に際して、以下のように省略している。

E1, 2 etc. = 『エチカ』第一部、第二部等、Praef = 序文、Def = 定義、P = 定理、Dem = 証明、C = 系、S = 注解、Ax = 公理、Post = 公準、L = 補助定理、Ex = 説明、Append = 付録
『往復書簡集』についてはゲブハルト版の続き番号を付記する。

² Goueroult[1968], pp.501-528.

本稿は以下のように進められる。まず中世における世界永遠説批判について、簡潔に紹介する(1節)。世界永遠説の問題とされるものの一つに、「無限の部分と全体が等しくなる」という実無限特有のパラドックスがあった。もし世界に始まりも終わりもなかったとすれば、無限の過去から時間のある一点までの間の時間は無限である。そして無限の過去から無限の未来までの間の時間もまた無限である。こうして時間全体とその部分は同じ無限量であるということになる。これは「全体は部分よりも大きい」という公理に反し、それゆえ不条理である。中世のスコラ哲学者たちはこれを利用し、世界永遠説への論駁を試みていた。次に、17世紀における世界永遠説についての議論を紹介する(2節)。当時においても、多くの哲学者たちが世界永遠説に反対する立場をとっていた。しかし、同時に神の永遠性を始まりも終わりもない時間として理解する立場が勢いを増しつつもあった。ところがこのような永続的な時間とはけっきょく実無限の肯定にほかならず、やはり「部分が全体と等しくなる」という問題を含んでいた。このような状況にあって、スピノザとマイエルの間に世界永遠説にかんする問題意識があったとしても不思議ではない。次に、スピノザの『無限についての書簡』を検討し、彼の無限論が世界永遠説の問題を解決可能である点を指摘する(3節)。次に、彼が世界永遠説を意識したうえで無限に関して論じていることを示すものとして、クレスカスの議論を検討する(4節)。最後に、いくつかのスピノザのテキストを検討し、彼が世界永遠説を支持していることを示す(5節)。

1. スコラによる世界永遠説批判

中世における世界永遠説批判の流れの発端となったのはアリストテレスとされている³。これに対してヨハネス・フィロポノスは“*De Aeternitate Mundi contra Aristotelem*”において批判を加えた。もし世界に始まりがなかったとすれば、現在に至るまで無限の日数が経過してきたことになる。しかしこれは、アリストテレスが否定したはずの実無限が現実存在することの実例になるのではないか。彼は様々な箇所世界永遠説に対する反論を試みている。たとえばシンプリキオスの報告によると、フィロポノスはアリストテレスに対して以下のような批判を加えている。

「もし生成されるであろう諸々の運動がすでに生成された運動の数に加算されるとき前者が後者を増加させるなら、無限なものを増加させることが不可能であるとすれば、それ以前に生成された運動は無限数ではないであろう」(1179.11-15)⁴

彼は次のように続ける。たとえば土星は30年に一回公転し、木星が12年に一回公転し、月はひと月に一回、太陽は一日に一回公転する。もし世界に始まりも終わりもないならば、土星はすでに無限回の公転をしていることになる。しかし木星は土星のおよそ3倍、また太陽は土星の30倍、月は土星の360倍、太陽は土星の1万倍の回数公転しているはずだ。しかし、無限よりも多い数はない以上、これは不条理である。それゆえ、世界には始まりがなければならない

³ Sorabji[1983], p.214.

⁴ Wildberg(Trans.) [2014], pp.145-146.

(1179.15-28)⁵。

こうしたフィロポヌスの議論は以後の世界永遠説に関する議論に大きな影響を与えた⁶。彼の証明は9世紀はじめからイスラムやユダヤの哲学者たちによって紹介されたのちヨーロッパに伝わった⁷。たとえばボナヴェントゥラは『ペトルス・ロンバルドゥス命題集註解』において、実無限の存在を否定する6つの証明を提示している。そのほとんどはフィロポヌスの議論に影響を受けている⁸。たとえば次の証明は、上に引用したフィロポヌスの証明が基礎となっている。

「無限に何かを加算されることは不可能である。これはそれ自体によって明白である、というのも加算を受け取る全てのものはより多くなるからだ。ところが、無限より多いものはない。ところで、もし世界が始まりを持たないのなら、しかし、それは無限に持続してきたのであり、それゆえその持続への加算はありえない。しかし、これが偽であることは確実である、というのも毎日の太陽の回転ごとにこれまでの総回転数に一回転が加算されているからだ。それゆえ云々。もしあなたが、過去に関してそれは無限だが、それでも現在、つまり今に関しては現実的に有限であって、それゆえ現実的に有限であるかぎりにおいては「より多く」が見出されるべきだと言うならば、反対に、過去において「より多く」が見出されるべきであることが指摘される。このことは不可謬な真理である。もし世界が永遠ならば、太陽の公転数は無限回である。さらに太陽の毎回転ごとに、必然的に月の回転が12回生じることになる。それゆえ、月は太陽よりも多く回転してきており、かつ太陽は無限回回転してきたことになる。そうすると、そうした回転数が無限であるかぎりにおいて、無限なものが無限なものを超過するということが見いだされるべきだということになる。しかしこれはありえないことだ」(ℓ.2, d.1, p.1, a.1, q.2.)⁹

何らかの数を加算される全ての数は元の数より大きくなる。しかし、無限数より大きいものはない。それゆえ、無限数に数を加算することはできない。世界永遠説を認めた場合、世界は無限な持続を持つことになるのだから、これに対してさらに持続を加算することはできない。しかし、毎日の太陽の回転（現代で言うところの地球の自転）がこれまでの総回転数に一回転を加えている以上、これは誤りである¹⁰。

このような証明はアキナス、スコトゥス、オッカムらを例外として、多くの中世神学者たちによって擁護された¹¹。このような仕方世界永遠説が論駁されるのは、実無限がもつ「部分が

⁵ Wildberg(Trans.) [2014], p.146.

⁶ 「彼は宇宙が始まりを持つかどうかという議論においてキリスト教を攻撃的にした」(Sorabji[1983], p.224.)

⁷ Sorabjiは代表的な例として、アヴェロエスの『自己矛盾の自己矛盾』(Tahafut al- Tahafut) やマイモニデスの『迷える者の導き』(Dalalat al-ha'irin)などを挙げている(Sorabji[1983], p.214)。またラテン世界に持ち込まれたのはマイモニデスのラテン訳を通してであろうとBianchiは推測する(Bianchi[2011], p.546.)。

⁸ Bianchi[2001], p.547.

⁹ A. C. Peltier(ed.) [1864], p.244.

¹⁰ Bianchi[1984], 142-147; Dales[1990], pp.92-93.)

¹¹ Bianchi[2001], p.547.

全体に等しくなる」という問題にあった。Murdoch の指摘によれば、13、14 世紀の思想家たちはこのことに気づいていたという。無限数をいくつかの部分に分割したとき、無限の全体とその部分が等しい量のものであるということになる。しかし「全体は部分より大きい」という公理に反することになり、これは不条理であると思われた。これを Murdoch は「不等な無限 unequal infinity」のパラドックスと呼んでいる¹²。14 世紀においては、このパラドックスを解決するための試みがなされた。それはたとえば、「全体は部分より大きい」といったユークリッドの公理や、等しい・より大きい・より小さいといった概念が無限数に対して適用できないとするものだった¹³。

2. 17 世紀機械論と世界永遠説

17 世紀において、世界永遠説の問題はかなり微妙なトピックとして取り扱われることになる。中世においてほぼ常識として通用していたと言っているポエティウス以来の伝統的永遠性概念が否定され、始まりも終わりもない時間として捉えられていく¹⁴。たとえばガッサンディは世界の創造と終末を認めながらも、時間に始まりと終わりを認めていない¹⁵。そうすると、始まりも終わりもない時間の中のある一点において世界が創造されたということになる。

しかしそうすると、結局「不等な無限」の問題が再発することになる。たとえば、永遠な過去から世界創造の瞬間までの間の時間は無限である。また永遠な過去からイエス誕生の間の時間も無限である。そうすると前者と後者は等しいことになり、これは不条理と思われる。要するに、伝統的神学の立場からすれば、終わりも始まりもない時間の存在の主張は世界永遠説の主張と本質的に変わらないということだ¹⁶。

実際近世の数名の自然哲学者は無限に対して「全体は部分より大きい」という公理や、より大・より小・等しいといった概念が適用できないという指摘をしている。たとえばニュートンはリチャード・ベントリーへの書簡において、「不等な無限」に対する解決を提示している。無限な空間内におけるすべての粒子が全方向に対して無限な引力を有しているものの、すべての無限なものが等しいからそれら粒子は均衡状態に留まると主張するベントリーに対して、ニュートンは「すべての無限なものが等しい」という前提条件の誤りを指摘する。彼によれば、無限なものは等しくもなく不等でもなく、いかなる割合も差異もないという。

「それゆえこの意味において、諸事物の等しさ、割合、差異についていかなる結論もそれらから引き出されることができません。そしてそれを試みる人々は一般的に誤謬推理に陥ります。だから人々が大きさの無限分割に対して「もし 1 インチが無限数の部分に分割されるならば、それら部分の総体は 1 インチであろう、そしてもし 1 フィートが無限数の部分に分割

¹² Murdoch[1982], p.569.

¹³ Murdoch[1982], pp.570-573.

¹⁴ Bianchi[2001], p.543.

¹⁵ Gassendi[1658], pp.162-178, 220-228.

¹⁶ Bianchi[2001], p.545.

されるならば、全ての無限なものは等しいのだから、それら部分の総体は等しいに違いなく、つまり、1 インチは1 フィートに等しいということになる」などと反論するときも誤っています。この結論の誤りの原因は前提そのものの誤り、すなわち全ての無限が等しいという前提にあります」¹⁷

またガリレオは『新科学にかんする二つの対話』(*Discorsi e Dimostrazioni Matematiche Intorno a Due Nuove Scienze*)において、ニュートンと同じく無限なものに対して等しい・より大・より小といった概念が適用できないという立場を表明している。この対話の登場人物であるサルヴィヤチは、分割不可能な無限小の点によって線を構成するためには無限数の点が必要であると主張する。これを証明するための準備作業として彼は次のような論を展開する。数の大半は平方数ではない。だから平方数と非平方数とを含めたすべての数はすべての平方数よりも多いはずだ。しかしどの平方数も一つだけ平方根をもっている以上、平方数はそれに対応した平方根の数と同じだけ存在するはずである。ところがいかなる数もある平方数の根であると考えられるのだから、平方根の数はすべての数と同じだけ存在するはずだ。だとすれば平方数は平方根と同じだけ存在し、またすべての数は根でもあるのだから、平方数はすべての数と同じだけ存在することになる。これがパラドックスと思われるのは、有限数と無限数との性質の違いに注意を向けないからだと彼は考える。1 から 100 までの自然数の間には 10 の平方数があり、10 分の 1 の数が平方数を占めている。しかし 1 から 10000 までの間の数では 100 分の 1 だけが平方数であり、100 万までの間にある平方数は 1000 分の 1 でしかない。しかし 1 から無限数までの間には無限数の平方数が存在するはずだ。ここから彼は次のように結論する。

「私にわかるのは、すべての数の総体が無限で、すべての平方の総体も無限で、それらの平方根の総体も無限であり、また平方の多さは、全ての数の多さより少ないでもなく、多いでもなく、またそれゆえ、等しい・より多い・またより少ないという属性は無無限なものうちには認められず、ただ有限量においてのみ認められるということだけだ」¹⁸

しかし、二点指摘しておきたいことがある。第一に、この二人の主張は世界永遠説に関する議論の文脈でなされたものではない。私が調べたかぎり、このようなアプローチで世界永遠説の解決を試みた哲学者は見つからなかった。第二に、これは 14 世紀において無限論を取り扱った神学者の一部が用いたのと同じ戦略であるという点だ。つまり、これは無限大にかんする新しいアイデアというわけではない。そうすると、17 世紀において「不平等無限」のパラドックスを解決するためのブレイクスルーが 17 世紀に存在したというわけでもなさそうだ。

他にも、ホブズは『物体論』第四部 26 章で、世界永遠説に関する伝統的な反対証明を馬鹿げたものとして否定する。彼によると、世界の大きさが有限なのか無限なのか、充滿しているか

¹⁷ Cohen (Ed.) [1958], pp.293-9; Murdoch[1982], p.570, note 17.

¹⁸ Favaro (Ed.) [1898], p.79.

いないかのいずれかで、また持続期間については始まりをもつか永遠なのかのいずれかであるという。始まりをもつならば原因や素材となる物質などについて探求可能だ。永遠ならばそうした原因を求め続けることになるだろう。でも無限とはなにかを探求することは有限な者には不可能である。だから無限なものについて概念を持つことはできない。だから世界が永遠であるかどうかは聖職者の権威によって決められるべきで、哲学的論証によって決められるべきでない。

「それゆえ私は、世界に何かしらの始まりがあったということを、自らの理性をもって自然的な事柄から証明したなどと自慢する者達を賞賛できない。彼らは正当にも、愚者たちからも識者たちからも蔑まれる。前者は彼らの言うことを理解しないし、後者は理解するからだ。実際、次のような仕方で証明する者を誰が賞賛するというのか？すなわち、もし世界に始まりが無かったならば、無限の日数（あるいはどんなほかの時間の尺度であれ）がアブラハムの誕生に先立っていたことになる。ところがアブラハムの誕生はイサクの誕生に先立ち、それゆえ無限なものが無限なものよりも、もしくは永遠なものが永遠なものよりも大きいことになる。しかしこれは不条理である、などと証明する者を。この証明は、ある人が、偶数の数が無限であるということから、偶数の数が全ての数の数と同じだけ存在する、つまり、偶数の数が偶数の数と奇数の数を足した数に等しいと結論する場合に似ている。このようにして永遠性を世界から排除する者は、同じ仕方で世界の創設者から永遠性を排除することにならないのだろうか？」¹⁹

見てわかる通り、これはスコラ哲学者たちによる「不等な無限」のパラドックスを用いた世界永遠説批判に対するただの罵倒であって、説得的な批判とはいえない。スコラ哲学批判の急先鋒といえる彼ですら、「不等な無限」のパラドックスを完全に否定できるような論拠を持たなかったと考えていいだろう。

3. スピノザ『無限についての書簡』における持続と時間

以上の議論をまとめると次のようになる。17世紀において、始まりも終わりもない時間としての永遠性という概念が力を持ち始めていた。他方でキリスト教の立場からの世界永遠説の否定も説得力を失ったわけではない。そうすると、そのような永続的な時間性は結局、中世哲学者たちが世界永遠説を否定したのと同じ根拠、つまり「不等な無限」のパラドックスによって攻撃を受けることになる。

そのような状況の中で書かれたのが、今回の主題となる『無限についての書簡』（Ep12）である。このテキストにおいて注目されるべき点は、分割不可能な無限が存在するという主張にある。そもそも無限なものを部分に分割すること自体に問題があると指摘することによって、彼は「不等な無限」のパラドックスを解決している。ゲルーはこの書簡でスピノザ自身の説が示されておら

¹⁹ Hobbes[1839], pp.336-337.

ず、無限にかんする誤りとその原因だけが提示されていると言っている²⁰。それに対して本稿では、この分割不可能性の指摘こそがスピノザ自身の重要な見解であることを示したい。

まずスピノザは、混同してはいけない二つの概念の区別を三組提示する。一組目は、定義上あるいは本質により無限なもの、原因によって無限なものとの区別だ。二組目は、端的に限界がないから無限なもの、その部分の最大と最小が知られているにもかかわらず、いかなる数によっても表現されえないから無限なものだ。三組目は、知性によってのみ思考可能なものと、知性と表象のどちらでも思考可能なものである。本稿では、この一組目と三組目について取り扱うことになる。こうした概念を区別しなかったことから、次のような認識ができなくなったと彼は言う。すなわち、いかなる無限なものが部分に分割されず、部分をもたず、またいかなるものが矛盾なく分割可能であるか。またいかなる無限が困難なく、他のものよりも大きいと考えられ、いかなる無限が他より大きいと考えられないかである。

次にスピノザは、こうした区別について正しく認識するためには実体・様態・永遠・持続といった概念について説明する必要があると言う。Goueroultによれば、三種の区別のうち一組目の区別は実体と様態の区別を示しているという²¹。スピノザ読者にとって『エチカ』などにおける実体と様態というカテゴリーは馴染みのあるものだろう。この書簡では実体・様態・永遠・持続という四概念が一度に並列されて取り扱われていることから、永遠と持続がこの書簡において実体-様態関係と同じ程度に重要なトピックとして扱われていることがわかる。

スピノザはまず実体について、必然的存在、唯一性ならび無限性を強調する。その一方で実体の状態である様態は本質に存在を含まず、それゆえ様態の現在の存在から未来や過去における存在が帰結することはないと彼は言う。ここからスピノザは、実体の存在が様態の存在とまったく異なる仕方から考察されなければならないと結論する。「すなわち我々は、持続の概念のもとに様態の存在のみを説明しうるのであり、これに対して実体の存在は永遠の概念のもとでのみ、いいかえると存在の、または古典的ラテン語ではないが、存在することの無限なる享受という概念のもとでのみ説明されうのです」。すなわち、様態の本質には存在は含まれていないから、様態の本質のみに注目するがぎり、その存在や持続をより大きくも小さくも考えられるし、部分に分割したりもできる。しかし永遠と実体は無限としか考えられないので、そうしたことはできない。

持続を任意に限定するということから、つまり持続を永遠なる諸事物から帰結する様式から分離することから、時間という概念が生じる。そして同じようにして量を実体から抽象して考察することから大きさという概念が生じる。そして実体の諸状態つまり様態を実体から切り離して分類することから数という概念が生じる。時間は持続を、大きさは量を、数は様態を容易に表象するための補助手段である。

先に触れた無限概念の三種類の区別のうち、三組目の内実がここで明らかになる。すなわち、実体や永遠は知性によってのみ把握され、表象力によっては把握されることができない。他方、様態や持続、量は知性によってのみでなく、表象によっても把握することができる。しかしその

²⁰ Goueroult[1968], p.386.

²¹ Goueroult[1968], p.387.

場合、それらを実体や永遠から切り離して考察することになる。ところが様態は実体や永遠から切り離しては正しく理解されえない。というのも、様態や持続・量は「自己の本質の力によるのではなくその原因の力によって」限界を持たないものだからだ。つまりそれらは原因である実体や永遠から切り離されたとき、無限なものとして理解されるべき根拠を失ってしまうことになる。こうして誤って理解された様態や持続、量という概念は時間や大きさ、数といった表象の補助手段と混同されることになる。このような表象の補助手段で自然の運行を理解しようとしたことが無限に関する誤りや混乱の起源であるとスピノザは指摘する。

以上のようなスピノザの議論から、「不等な無限」のパラドックスに対する解決を見出すことができるだろう。ゲルーの指摘する通り、「不等な無限」をパラドキシカルなもののみならず立場は「あらゆる無限が表現されるのは、数の中でももっとも大きいものによってのみである」という前提の上に立っており、さらにこの前提は「無限に対して数が適用される」ということを前提にしている²²。そこでスピノザは、持続が分割不可能で、それに対して数を適用することができないことにより、不等な無限の問題を解決したのだ。

スピノザによる「不等な無限」のパラドックスの解決は、他の哲学者たちのものと比べればきわめてラディカルなものといえる。ガリレイやニュートンは、大きい・小さい・等しいという概念を無限に対して適用することが誤りであると指摘していた。しかしスピノザに従うならば、これは少なくとも、時間や持続の問題を解決することができない。というのもこの書簡で彼は、ゼノンのパラドックスの亜流とでも言うべき例を挙げている。

「人が持続を抽象的に考えこれを時間と混同し、そしてこれを部分に分割し始めるとしたら、彼はたとえば在る時間がどのようにして過ぎ去りうるかをけっして理解できないでしょう。すなわち、在る時間が過ぎ去るためにはまずその半分が過ぎ去らねばならず、またもう半分、さらにまたその半分が過ぎ去らねばなりません、そしてもしこのようにつづけて、無限に残りから半分を引いていくとしたら、けっして時間の終わりに達することはできないでしょう」

こうして多くの人々が持続を瞬間の集合からなると主張し、「カリュプティスを避けんとしてスキュラに遭遇した」と彼は言う。じっさい、持続全体を瞬間の無限集合としたうえで「無限にはより大きい・小さい・等しいといった概念が適用できない」と主張したとしても、「不等な無限」とは別の問題が生じる。ホップズの例を借りて説明すると、仮に無限な過去からアダムの時代までの時間の幅と、無限な過去から現在までの時間の幅を比較して、前者よりも後者のほうが長いと言えなかったとすれば、我々は時代の経過について何も言えなくなるだろう。それに対してスピノザは、本来的に無限であり分割不可能な持続と、分割可能かつ測定可能な表象の補助手段である時間とを区別することで、このような問題を回避することができたのである²³。

²² Gueroult[1968], p.519.

²³ 時間と持続の区別に関しては、スピノザはデカルトに従っている。しかし持続に部分を認めない点において、スピノザはデカルトから距離をとっている (Gorham[2018], pp.58-59.)。

4. クレスカスと世界永遠説

書簡の末尾には補足として、ヒヤスダイ・クレスカスの議論についてのコメントがされている。

「しかしここでついでに注意したいのですが、私の意見では、近年の逍遥学派の人々は神の存在を示さんとする古人たちの証明を正しく理解していませんでした。と言いますのも、たとえばラビ・ヒヤスダイと呼ばれるユダヤ人によって次のように証明されます。「もし原因の無限な進行があるなら、存在する全てのものは原因されたものでもあるだろう。しかし原因されたものに、自己の本性の力で必然的に存在することは適合しない。そうすると自然の内に、必然的に存在することがその本質に属するものはないということになる。しかしこれは不条理である。ゆえに先の前提もまた不条理である」。この論証の意図は、実無限が存することや、原因の無限な進行が不可能であるという点にはなく、ただ自己の本性によって必然的に存在しない諸事物が、自己の本性によって必然的に存在する事物から存在へと決定されると考えられるべきであるという点にあります」²⁴

この書簡で神の存在証明が話題に上るのは少々不自然とも思われる。しかし、詳しく検討すれば、この証明が実は世界永遠説に関係するものだということがわかる。

上記引用文におけるクレスカスのものとされる議論は、スピノザ自身による解釈が加えられた概略にすぎない²⁵。実際のクレスカスのテキストは、マイモニデスの議論を紹介し、それを土台として神の存在を証明するものだ。『迷える者の導き』第二部導入部において、マイモニデスは神の存在・一性・非物体性証明のために必要とされる25の前提を羅列している。そのうち第三の前提が「たとえそれらが大きさを与えられていなかったとしても、無限数の原因と結果の存在は不可能である」というもので、これは実無限ならび因果の無限系列の否定を意味する²⁶。

クレスカスの『主の光』(Or Adonai)において、この前提を取り扱う議論は三つの箇所に分散している。一つ目はマイモニデス自身の主張を紹介し、その証明を提示するものである。その中で彼は、原因と結果の無限系列を構成する全てのものが、それ自体においては可能的存在をもつだけであり、それらが現実的に存在することを正当化するような根拠となるような、いわば原因を持たない原因の存在を要求すると指摘している²⁷。

しかし裏を返せば、そうした無限系列を現実化する決定者さえいればいいということになる。ところがマイモニデスは、原因と結果の無限系列が端的に不可能であると主張しているのだった。それゆえクレスカスの議論は一見マイモニデスの主張を緻密化し説得しようとしているように思われるが、実際には前提を暗に否定することによってこれを覆そうとしていることになる。

実際二つ目の議論において彼は、ある原因が無限数の結果を持つことが可能であるという主張

²⁴ 最後の文に関しては Klever[1995]の提案に従い、non を排除して訳した。

²⁵ Ex. gr. Melamed[2016], p.205.

²⁶ Pines (Trans.) [1963], p.235; Cf. Melamed[2016], p.206.

²⁷ Weiss (Trans.) [2018], pp.46-47; Cf. Melamed[2016], p.207.

を展開する。すなわち、単一の原因が一つより多くの結果の流出因であることが可能であれば、無限に多くの結果の流出因であることも可能はずだ。そうした結果がある原因の直接的な結果であることが可能なのは明証的である。それなら、そうした結果が相互に原因と結果の関係で結び付けられ無限の因果系列を構成し、ある原因がそうした因果系列の総体をもたらしたということも不可能ではないはずだ²⁸。

このような議論を展開したあとで、彼は次のように補足する。

「しかしこの命題の真の帰結とは、それら結果が無限数であろうと有限数であろうと、一が他の原因であるとき、他のなにもものにも原因されない第一原因が存在せねばならないということである」²⁹

そして第三の議論において、この「原因なき原因」が神であることが明らかにされる³⁰。

こうしてクレスカスは神の存在を証明しながらも、マイモニデスの意図とは反対に、実無限と世界の永遠性を可能なものと暗に主張している。このようにしてみれば、この書簡の背景の一つとして世界永遠説の議論があったとみなすほうが自然だろう。

5. スピノザは世界永遠説を支持しているか

それにしても、スピノザ自身は、世界永遠説に対する自分の立場を明らかにしていないように思われる。しかしすでに見たとおり、『無限についての書簡』でも持続は知性によって正しく把握されるかぎりにおいて無限であると言われている。たしかにガッサンディやニュートンのように、世界創造以前の空虚な時間を考える哲学者もいる。しかし彼の持続概念は事物の存在と切り離すことのできないものであり、空虚ではありえない。そして世界永遠説にかんするクレスカスの議論についての話題からみても、彼は世界永遠説を支持しているように思われる。このことは、スピノザの他のテキストからも読み取ることができる。たとえば『エチカ』では「神ある属性が神のその属性によって必然的かつ無限に存在するような一種の変状に様態化したかぎりにおいて、この属性から生起する全てのもの」つまり、いわゆる間接無限様態が必然的かつ無限に存在すると言われている (E1P22)。そしてスピノザは、この間接無限様態についての例示を求められたときに「無限の仕方に変化しながらも常に同一にとどまる宇宙全体の様相」(Ep64)を挙げている。

また『形而上学思想』からも、いわばネガティブな仕方でも彼の世界永遠説を読み取ることができる。このテキストは、スピノザが当時の新スコラ哲学の概要を独自の仕方で紹介したものであり、そこから新スコラ哲学に対する彼の認識が伺えるはずだ。

スピノザは、創造以前には時間も持続も考えられず、むしろ事物の創造と同時に始まったと言

²⁸ Cf. Melamed, pp.208-209.

²⁹ Weiss (Trans.) [2018], p.84.

³⁰ Weiss (Trans.) [2018], pp.100-101.

う。そして被造物は創造の後も絶えず神によって維持されなければならないので、形相を持たない創造以前の質料が神と共に永遠であったとはいえない。

さらに彼は、創造以前の時間や持続の存在、ならび世界永遠説を否定する。その中で彼は「無限な持続の可能性」を主張する人々の議論を二つ紹介し、それらに反論を加えている。第一の議論は「産出されたものは、時間的にその原因と同時にありうる。ところで神は永遠の過去からあったのだから神の結果もまた永遠の過去から産出されえたはずだ」というもので、その例として「永遠の過去から神によって産出された神の子」が挙げられる。第二の議論は次のようなものだ。つまり、神は自由に行為する場合にも必然的に行為する場合にも同じ能力を持つ。しかしもし神が必然的に行為するとすれば、神は無限の力を持つがゆえに、神は世界を永遠の過去から創造しなければならなかった。

こうした議論は、世界永遠説についてのヘーレボルトの議論を基礎としている³¹。これは16世紀スペインのイエズス会士ベネディクト・ペレイラの世界永遠説に論駁するという形式で進められる。この両者は、神が自由選択によって世界を創造する点、また仮に本性の必然性によって創造するとすれば必然的に世界は永遠であろう点、そして自由であれ必然的であれ、神の力能に変わりがない点において一致している。その上でペレイラは自由意志によって行為する場合にも力能に差異がない以上、自由意志によって永遠な世界を創造することが可能だと主張している。

これに対してヘーレボルトは次のように反論する。神において、必然的な行為と自由意志による行為には違いがある。すなわち、神が必然的に行為するとき、必然的に神の本性が及ぶ全ての事柄を神はなしうる。しかし自由に行為するとき、神は欲するかぎりのことだけをなしうる。というのも、神が自己の内部において活動する場合は意志は要求されないけれど、外部への行為においては、意志が介在するからだ。それゆえ、世界は自由意志によって創造されたのだから、やはり永遠ではありえない。

ここで注目したいのは、この二者の間でも共通見解となっていた点に対して、スピノザが批判している点だ。というのも彼は「反対に我々は、仮に本性の必然性によって神が行為したとしても神は無限な力を有している、ということを否定する」と言っているからだ（CM2.10）。

ところが『形而上学思想』において展開される世界永遠説への反論は、『エチカ』において明らかに否定されている。実際「絶対的に無限な存在、あるいは各々が永遠かつ無限な本質を表現する無限に多くの属性から構成される実体」（E1Def6）と定義される神は、その本性の必然性から無限に多くのものを無限に多くの仕方でするものとされる（E1P16）。さらに彼は、神が自由選択によって世界を創造するという考えに対して、神の全能を否定するものだと反論を加えている。

「しかし私は、神の最高の力能あるいは神の無限の本性から無限に多くのものが無限に多くの仕方です、つまり全てのものが必然的に流出したこと、あるいはつねに同一の必然性をもつ

³¹ Heereboord[1665], pp.68-70.

て生じること、そしてこれは三角形の本性からその三つの角の和が直角に等しいことが永遠の過去から永遠の未来に至るまで生じると同じ仕方によるということを十分明晰に示したと信じる」(E1P17C2S)

たしかにスピノザは『形而上学思想』以外のテキストでは、世界永遠説について明示的な主張をしていない。しかしこのようにして見てみれば、『形而上学思想』において世界永遠説を反駁するためにスピノザが主張した事柄の全てが『エチカ』において否定されていることがわかる。彼が世界永遠説を支持していないと考えるほうが不自然だろう。

結論

『無限についての書簡』においてスピノザは、知性で把握されるかぎりにおいて持続が分割されえないということを示してみせる。持続は様態の存在を説明する概念であり、それゆえ実体という原因によって無限なものであると考えられる。このような無限は、表象によって原因から抽象されたとき分割可能なものとして人間精神に把握される。しかし、知性によって本来的な仕方では把握されたらいい、それは分割不可能な無限体として理解される。

こうしたスピノザの指摘は、スコラ哲学者たちが世界永遠説を論駁するための重要な根拠であった「不等な無限」のパラドックスを解決するものとして理解できる。時間が分割不可能であるということになれば、そもそも時間全体とその部分とを比較すること自体が誤りであるということになるからだ。14世紀の哲学者たち、ならびニュートンやガリレイらによる「不等な無限」の解決の試みが分割可能性を前提としたものだったことを考えると、彼の考えはきわめて異質であるといえる。

そして、書簡の最後において紹介されるクレスカスの議論は明らかに世界永遠説にかんするものであり、その文脈で『無限についての書簡』を読むことは適切である。またスピノザは世界永遠説に関して自らの立場を明言していないようにも思われるものの、彼の哲学説を当時の文脈と照らし合わせれば、彼が世界永遠論者であったと結論することが可能である。

もちろん、この書簡の内容は本稿で紹介したかぎりのものではないし、その意義は実無限のパラドックスの解決ならび世界永遠説の立場に役立つだけというだけではない。しかし、これ以上の検討にかんしては今後の課題としたい。

(こたけようすけ 哲学哲学史・博士後期課程)

参考文献

- ・ Adolphe Charles Peltier (ed.) *Saint Cardinal Bonaventura Opera Omnia*, L.Vives, vol.2, 1864.
- ・ Adrian Heereboord, *Meletemata Philosophica*, Joannes Ravesteinius, 1665.
- ・ Antonio Favaro (Ed.), *Edizione nazionale delle opere di Galileo Galilei*, Tipografia di G. Barbera, vol.8, 1898.
- ・ Christian Wildberg (Trans.), Richard Sorabji (Ed.), *Philoponus: Against Aristotle on the Eternity of the World*, Bloomsbury, 1987, 2014.
- ・ I. Bernard Cohen (ed.), *Isaac Newton's Paper and Letters On Natural Pholosophy*, HUP, 1958.
- ・ John Emery Murdoch, "Infinity and Continuity," in Kretzmann, Kenny, Pinborg, (eds.) *The Cambridge History in Later Medieval Philosophy*, CUP, 1982, pp.564-591.
- ・ Luca Bianchi, "Abiding then: Eternity of God and Eternity of the World from Hobbes to the Encyclopédie," in Pasquale Porro (ed.), *The Medieval Concept of Time*, Brill, 2001, pp.543-560.
- ・ ———, *L'errore di Aristotele. La polemica contro l'eternità del mondo nel XIII secolo*, La Nuova Italia Editrice, 1984.
- ・ Martial Goueroult, *Spinoza, I: Dieu (Ethique, I)*, Aubier Montaigne, 1968.
- ・ Geoffrey Gorham, "Descartes on the Infinity of Space vs. Time", in Nachtomj, Winegar (eds.), *Infinity in Early Modern Philosophy*, Springer, 2018, pp.45-61.
- ・ Harry Austin Wolfson, *Crescas' critique of Aristotle*, Harvard University Press, 1929.
- ・ Pierre Gassendi, *Opera Omnia*, Anisson and Devenet, vol.1, 1658.
- ・ Richard Dales, *Medieval Discussions of the Eternity of the World*, Brill, 1990.
- ・ Richard Sorabji, *Time, Creation, and the Continuum*, Duckworth, 1983.
- ・ Roslyn Weiss (Trans.), Hasdai Crescas (Auth.), *Light of the Lord (Or Hashem)*, OUP, 2018.
- ・ Sholomo Pines (Trans.), Moses Maimonides (Auth.), *The Guide of the Perplexed*, University of Chicago Press, Vol.2, 1963.
- ・ Thomas Hobbes (Auth.), Molesworth (ed.) [1839], *Opera Philosophica quae latine scripsit Omnia*, Bohn, vol.1, 1839.
- ・ Wim Klever, *Actual infinity: A note on the Crescas-passus in Spinoza's letter12 to Lodewijg Meijer*, in *Studia Spinozana* 10, 1995, pp.111-119.
- ・ Ytzhak Melamed, "Eternity in Early Modern Philosophy", in Melamed, (Ed.) *Eternity: A History*, OUP, 2016, pp.129-167.

Spinoza's "Letter on the Infinite" and The Eternity of the World Yosuke KOTAKE

In this paper, I argue about Spinoza's "letter on the infinite" in the context of a controversy on time and the eternity of the world in the 17th century.

Many of the philosophers who attempted to refute the possible eternity of the world, emphasized a problem called the paradox of "unequal infinite", which arises if they divide the infinite into the parts.

There are some mathematical philosophers tried to solve the paradox of "unequal infinite" by a prohibition against applying some axioms to the infinite, but this solution seems not to be applied to the problem of the eternity of the world.

Spinoza claims that there are different types of the infinite, and that some infinite cannot be divided into the parts absolutely, and some cannot be divided if it is contemplated by the intellect, etc. I think that he applies this solution to the paradox of "unequal infinite" and that he is committed in the eternity of the world.

〔キーワード〕

世界永遠説、無限、分割可能性、時間、持続